

# 東北 VALUE SIGHT ..... 秋田



秋田まちづくり株式会社 代表取締役社長  
**藤井 明** (ふじい・あきら)

1949年 秋田市生まれ  
1974年 早稲田大学卒業 同年ジャスコ(現イオン)入社  
1976年 株式会社かおる堂入社  
1988年 秋田青年会議所理事長  
1993年 秋田築菓子一乃穂創業。秋田のお米を使用した「しとき菓子三品」がヒット商品に。  
2001年 秋田県公安委員会委員長  
2007年 秋田商工会議所副会頭  
2009年 財団法人平野政吉美術館理事  
2009年 秋田まちづくり株式会社代表取締役社長  
株式会社かおる堂 <http://www.kaorudo.jp/>  
秋田築菓子一乃穂 <http://www.shitogij.jp/>

秋田赤十字病院、県婦人会館の移転によって長らく再開発が待たれていたエリアに、今年7月、商業機能や住居機能など多機能施設を備えた「エリアなかいち」がオープンした。必ずしもスムーズな再開発とは行かなかったが、秋田まちづくり株式会社を中心となって情熱を注いだ。ここでは、その取り組みのプロセスに注目した。

## うよ 紆余曲折を経て秋田市 中心部の拠点が完成 「エリア なかいち」

### 停滞する秋田県経済の希望に

震災後、秋田県の観光需要は東北6県の中でも突出して落ち込み、その結果、宿泊および商品販売の動向に多大な影響を及ぼした。秋田県は全国トップの人口減少率、高齢化人口比率に表れているように社会構造の変化に根差した問題も年々深刻になる中、震災前から続くデフレや円高の長期化により経済情勢が一段と悪化し、会社倒産・廃業、大規模なリストラが日常化している。消費の停滞や明るい兆しを見出すことが難しい当県にとって、今や「エリアなかいち」のオープンが市民の明るい希望と共に、「一隅を照らす」ことになるだろう。

### 日赤病院移転が中心部の衰退に拍車

なぜ、足掛け15年近くもこのエリアの開発に手間取ったのだろうか。秋田赤十字病院、県婦人会館のあったエリアは、秋田駅から600m程の近さにあり、その通り道の仲小路商店街を随分と潤わせた。しかし、人口が増え続けると想定したまちづくりは、秋田市の中心街ではなく、郊外の御所野に県内最大のイオンモールを売場面積12万㎡、最近の売上高200億というくらいまで成長させた。正に不便な場所が便利になり、便利になるべき秋田市中心市街地が不便な処になる序章となった。また、駐車場不足が理由の日赤病院の移転は、街の空洞化が予想出来たのに、反対運動もさほどなく承認された。

このことは当時、秋田県を代表する百貨店が声を上げなかったために、反対運動に火がつかなかったのだと思う。私は、その当時、秋田青年会議所の理事長として「ふるさと実感千秋公園」という千秋公園を核とした中心街主体のまちづくりを推進し、秋田市のど真ん中で、花火を打ち上げ、8万人の人出を作った事がある。その時に協力支援いただいたのは、高田市長、照井助役、秋田県警大貫本部長、

NTT藤野支店長、東北電力大関支店長の面々(いずれも当時)だった。中心部を損得抜きで何とかしようという強い気持ちがあれば、こう長く空白の時間は流れなかったと思う。

### 市街地再開発に取り組むきっかけ

第三者的に見ていた私が、この中通一丁目市街地再開発に取り組むきっかけになったのは、皮肉にも平野政吉美術館(秋田県立美術館)移転反対を表明したからだった。事務局長より、美術館を運営する財団法人の理事になってくれないかとの打診があった。もちろん、事務局長は移転反対派であった。しかし、元理事より内部の事情を訴えられて、私の思いは移転賛成に傾いていった。財団は平野家の所有財産を守るだけに力を注ぎ、補助金の大半を人件費に費やしていたのだ。まさに美術館に人を呼べない典型的な事業を展開していたのだが、にわかに文化団体などから反対運動が起こり、1万7,000余名もの署名が集まった。ただ、全県下に燎原の火のような広がりが見えず、県議会議員の迷いに迷った議決により移転承認されると、水が引くように沈静してしまった。

現在、「エリアなかいち」に移転する美術館は安藤忠雄氏の設計で、重厚感がある立派な美術館に仕上がっている。特に2階からの水盤を通しての眺望が千秋公園のお堀とあいまって素晴らしい。この光景は、再開発組合の前理事長だった故加藤正男氏が待ち望んでいたものだった。

実は、2008年4月28日、病床にある加藤氏の意識が無くなる4時間前、加藤氏の病室に呼ばれた。彼は私の手を握り、こんしん 渾身の力を込めて、再開発事業の事、秋田まちづくり株式会社や自身の関与する会社、

ご子息の事など懇願された。それから1年後の秋、私は意志を継いで秋田まちづくり株式会社の代表と中通一丁目街区再開発組合の理事に就任し、どんどん活動にのめり込んでいくこととなった。

### 人間関係の苦難を乗り越える

一番大変だったのは、やはり人間関係だった。いろいろな場面で取締役会は対立軸が存在し、その解消に努めた。

また、商業に疎い役員も多かったため、テナントが決まらなると1年も前から心配する状況であった。当初、東京の企業にテナント管理やリーシングを全面的に委託する向きもあったが、私が当社主体でテナントを集めると発表した時には、地元マスコミや中央紙も難色を示した。さらにもめたのは県議会だ。情報不足な議員も多く、公的資金を135億も使うのは無謀だし、近隣に成功例がないとし、もっと様子を見たいという意見が多数だった。

こんな経緯の中で完成した街区は、「エリアなかいち」として以下の建物と施設からなっている。



「エリアなかいち」の完成予想図

### 多機能を売りにかっつての賑わいを

商業施設は、商業・駐車場棟の1、2階の一部3,700㎡、秋田まちづくり株式会社がテナント28店を運営。中心となるのは、地元企業の秋田まるごと市場が運営する「サン・マルシェ」である。

駐車場棟は2階～5階まで507台が収容できる自走式立体駐車場で、1時間100円、30分以内なら無料である。ゆったりとして安全に配慮され、電気自動車の充電施設も5台設置されている。

秋田市にぎわい交流館「AU・あう」は駐車場と同様、当社が指定管理者になり、地下1階、地上4階建、5,200㎡で多目的ホール(360名収容)や展示ホール、工房、研修室や防音設備の整った音楽練習室などが完備され、各種サークル活動の場と期待されている。

住宅棟は13階建、1階は商業施設、2階～3階は16戸の賃貸住宅、4階～9階はケアハウスと特別養護老人ホーム、10階～13階は分譲マンションと地権者の住宅として整備、分譲予定である。

新秋田県立美術館3,700㎡には平野政吉コレクションを代表する藤田嗣治の「秋田の行事」を展示し、人を呼べる美術館を目指す。建設材のガス抜きとの関係から本格的な開館は来年秋となるが、それまでは展示スペースとして活用される。

7月5日に商業・駐車場棟、21日にはにぎわい交流館がオープンし、住宅棟が完成する9月末には秋田市の中心街が一変していることだろう。また、2,710㎡の広場は竿燈まつりを始め数々のイベントに使用され、本稿をお読みいただいている頃には、新たな息吹が吹き込まれ多くの人々で賑わっていることを期待する。しかし、再開発はこれからが正念場。県民のニーズと利用者の利便性を絶えず考え、改善を繰り返し進化成長し続ける事を願っている。